各務支考『つれづれの讃』続考

島内裕子[1)]

要旨

『つれづれの讃』は、各務支考（一六六五～一七三一）による『徒然草』の全段にわたる評論書である。宝永八年（一七一一）の自跋を持つ。

『つれづれの讃』を評論書と呼称するのは、支考が『徒然草』を内容のまとまりに注目して、大きく四十九の段に区切り直し、それぞれに漢字四字で題名を付けていること、および、諷詞・褒貶・断絶・虚実・変化など、十三種の分析批評用語を駆使して、『徒然草』の内容を批評していることが、江戸時代に書かれた他の多くの『徒然草』注釈書には見られない独自性を有するからである。

拙稿「各務支考『つれづれの讃』にみる『徒然草』の新しい読み方」（『放送大学研究年報』第三十九号、二〇二一年）では、『つれづれの讃』の首巻に書かれている分析批評用語、『徒然草』の基本事項である大綱、および、支考による兼好伝資料の集成を取り上げて、支考の批評態度の特徴を論じた。けれども、首巻に続く全八巻からなる、支考の全段解釈と批評を概観するところまではできなかった。本稿では、「各務支考『つれづれの讃』続考」と題して、改めて支考の『徒然草』観を把握する。

支考の『つれつれの讃』は、全体を通して、章段間の繋がり方や、個々の文章の展開に注目するという特徴が見られる。そのことは、『徒然草』を通して、文章展開や、自分自身の考えの表明の仕方、話題の転じ方などを具体的に読み取るという新しい読み方の発見にとどまらず、散文の書き方の様式化、すなわち、和歌や俳諧のような定型韻文ではない、不定型の散文をどのように書くかという、文章法の提示への階梯となった。そのことは、支考の先師たる芭蕉の遺志としての俳文の隆盛を企図するものでもあった。後に『本朝文鑑』（一七一八年）や『和漢文操』（一七二七年）などの俳文撰集をまとめた、支考の文学世界における『徒然草』の役割は、大きいものであった。

はじめに

『つれづれの讃』は、各務支考（一六六五～一七三一）による『徒然草』の全段にわたる評論書である。宝永八年（一七一一）の自跋を持つ。

拙稿において『つれづれの讃』を、注釈書ではなく、評論書と呼称するのは、支考が、序段を含めて全二百四十四段の章段区分によって読まれ、注釈研究もされてきた『徒然草』を、内容のまとまりに注目して、大きく四十九の段に区切り直し、それぞれに漢字四字で題名を付けていること、および、諷詞・褒貶・断絶・虚実・変化など、十三種の分析批評用語を駆使して、『徒然草』の内容を批評していることが、江戸時代に書かれた他の多くの『徒然草』注釈書には見られない独自性を有するからである。このような、『徒然草』に対する独自のアプローチによって、支考は『徒然草』の新しい読み方を提示した。

以上の観点から論述したのが拙稿「各務支考『つれづれの讃』にみる『徒然草』の新しい読み方」（『放送大学研究年報』第三十九号、二〇二一年。以下、「前稿」と略称）であるが、そこでは、『つれづれの讃』の首巻と巻二の冒頭までしか取り上げられなかった。したがって、本稿では、『つれづれの讃』の最後までを概観して、支考の『徒然草』観の全貌を把握したい。本稿を「各務支考『つれづれの讃』続考」とするゆえんである。

支考の『つれつれの讃』は、全体を通して、章段間の繋がり方や、個々の文章の展開に注目するという特徴が見られる。支考は『つれづれの讃』を通して、文章展開や、自分自身の考えの表明の仕方、話題の転じ方などを具体的に読み取る、新しい『徒然草』の読み方を発見した。そのことは、支考の先師たる芭蕉の遺志としての「俳文の隆盛」を実践することにもつながった。

本稿において、『つれづれの讃』の全貌を紹介し、支考による『徒然草』の解釈を検討して、このきわめてユニークな評論書の意義と達成を把握したい。

一　『つれづれの讃』巻之二の章段区分と解釈の独自性

『徒然草』は江戸時代の初期以来、多数の版本によって広く流布したが、早い時期から現行のように、序段以下、第一段から第二百四十三段までに区切られ

1) 放送大学教授（「人間と文化」コース）

て、読み継がれてきた。序段と第一段をまとめて第一段とする版本もあったし、上下二冊の形で出版されて、第百三十七段が下巻の冒頭となって、そこから改めて第一段とすることもあった。この場合には、上巻から下巻まで、通し番号になっていない。けれども、次第に、現行のような章段区分の通し番号で統一されて、現代に至っている。

そのような『徒然草』の伝来において、支考の『つれづれの讃』が、『徒然草』の全段を、四十九の「大段」に区切り直して、それぞれの大段に漢字四字の題名を付けたことは画期的であり、それ以前の注釈書には見られない発想であった。ちなみに、支考が『つれづれの讃』を刊行する以前にすでに、慶長九年（一六〇四）の『徒然草寿命院抄』を嚆矢として、数多くの『徒然草』注釈書が刊行されていた。[1] それらを総称して支考は「十五抄」と言うが、実際にはそれ以上の注釈書の蓄積が背景にあった。

けれども、支考が『つれづれの讃』で行ったのは、『徒然草』の注釈ではなく、構造分析であった。支考は、新しい章段区分を提示したが、先行する注釈書群においてすでにほぼ共通している章段区分を否定しているわけではなく、むしろ従来の章段区分に拠りながら、四十九に区切り直して「大段」としているのである。

その際に、漢字四字の題名（以下、本稿では「四字題」と略称）をそれぞれの「大段」に付けて、その下に、二行の小書きで、章段の冒頭を示したうえで、その「大段」に含まれる章段の数を示しているので、それぞれの「大段」の規模がすぐにわかる。支考の区切り方は、必ずしも複数章段をひとまとめにしているわけではなく、通行の一段をそのまま一段とする場合もあれば、一段を細分化して複数段にすることもある。たとえば、前稿で取り上げた巻之一では、序段を《起語》として、大段の一段から九段までは、現行の章段番号と同一である。すなわち、複数章段をひとまとめにはしていない。

とは言え、その後の区分では、現行の章段番号と、支考による大段の番号が異なるので、前稿同様、「大段」の章段番号は《》で示し、現行の章段番号は、そのままの番号で示すことにする。前稿では、巻之二の冒頭の、《第十二段》四季観相二章」、すなわち、現行の第十九段から第二十段までの考察にとどまっていたので、本稿では第二十一段から始めたい。[2] 巻之二の内訳を一覧すれば次のようになる。便宜上、順に番号を付し、現行の章段番号を付け加えた。

①《第十二段　四季観相　二章》……現行の第十九段から第二十一段（前稿に既出。二章とあるのは、現行の第十九段と第二十段を、まとめたため。）
②《第十三段　古今一感　（八章）→九章》……現行の第二十二段から第三十段
③《第十四段　文対前実　七章》……現行の第三十一段から第三十七段
④《第十五段　生死到来　五章》……現行の第三十八段から第四十二段
⑤《第十六段　文対後虚　六章》……現行の第四十三段から第四十八段
⑥《第十七段　老病迅速　一章》……現行の第四十九段
⑦《第十八段　不断不続　八章》……現行の第五十段から第五十七段

ここからは、それぞれの大段に付けてある四字題の検討、および、大段の区切り方を中心に考察してゆきたい。ただし、①は前稿で取り上げているので、②から始めることとする。なお、『つれづれの讃』で、四字題の後に「章」とあるのは「章段」のことである。たとえば、大段《第十二段》のところで「二章」とあるのは、この大段が二つの章段からなることを示している。

②は、『つれづれの讃』における大段《第十三段》であるが、「古今一感　八章」とあるのは誤りで「古今一感　九章」とすべきところである。《第十三段》の評釈は四節に分かれて、「此三章は」「此二章は」「此二章も」「此二章も」とあり、合計九段である。ちなみに、首巻の「標目」では、「古今一感　九章」となっており正確に記されている。支考が大段《第十三段》を「古今一感」と名付けたのは、この九章はすべて、「古き世をしたひては、今の世をかこち、或は君臣の不道をなげき、或は男女の別れを惜しみて、悲もあるべく、無常もあるべき」一連の章段であると解釈したからである。また、『徒然草』には「さまざまの変化」を書き尽くしているが、この九段だけは、離別を悲しみ、身の上の感情を書き尽くしていると述べている。

③の《第十四段》は、「文対前実」と名付けた七段からなる。「此七章は、（中略）前段の実をちらしたると知るべし」と書いて、《第十三段》の九章段が、兼好自身の別離の悲しみや身の上の感情を述べて「実」を示していたが、この七章段は、雪の朝（第三十一段）に月の夕べ（第三十二段）を対して、「二章（段）ともに、世のつねの心遣ひを言へるか」と注意を喚起し、これは「文対」であるとする。と同時に、この二章段が「今は亡き人」「その人失せにけり」と書かれているのは、それ以前の九章段の別離・無常の俤がある、とも述べている。けれども、「次には櫛形の穴（第三十三段）に甲香の蓋（第三十四段）を対し」ている点で「対」の書き方が続くが、「いつしかなき人の無常をも言ひ止みて、ただ文章の模様のみなるもおかし」と述べている。「模様」は首巻の「凡例」に掲げ

られている十三種の批評用語のひとつで、前稿に書いたように「文体・内容の変化」を言う。ここでは大段《第十三段》の別離や無常から次第に変化していることを指す。

それに続く現行の第三十五段は、手跡の良し悪しを書いているので、直前とは繋がらないが、この段を起点として、次の第三十六段が手紙で用事を頼んできたと解釈して、関連付け、「久しく音づれぬ人」から「朝夕なれたる人」という、「親疎のさかひも明らかに」対応させていると述べて、このあたりの書き方を絶賛し、「此文対の法を書き出だして、文字言語の自在には遊ぶらん」と評している。支考は、徒然草の一段ごとの生成と展開に注意を払い、その流れを生き生きと再現する読み方を示している。

④の《第十五段》は、「生死到来」と名付けた五段からなる。ここも《第十三段》のように、節に分けて論評するスタイルを取る。第一節は第三十八段と第三十九段である。人生の目標を掲げながら、次々と否定してゆく第三十八段の書き方を、「言ひ消して」「一段上に説き登ぼせて」、「老荘の虚無を俤にして、仏者の空相を説く」と明確にまとめているが、それを支考みずから否定して「唯世のつねの法語に似て、文章さして面白からず」と評す。この段に続いて法然の言葉を出して、「念仏の段に心をほど」いたことを誉めている。第二節は第四十段のみを取り上げて、注釈者たちの諸説を的はずれであると笑い、この段は「あやかし」であるとの自説を述べる。「あやかし」とは、首巻の凡例に挙げている批評用語で、聖賢が人を迷わすことを「あやかし」と定義しているのである。したがって、注釈者たちがそれぞれいろいろな解釈をこの段に付けているのも、迷わされているだけであり、この第四十段の栗しか食べなかった娘という話に対しては、各自が自分で読んで、自分で悟るべきであると、述べている。第三節は、第四十一段（賀茂の競べ馬）と第四十二段（行雅の奇病）の繋がりを、行雅の段は第四十段の栗娘に続くのに、その間に賀茂の競べ馬の話を入れたのは、「生死到来」という『徒然草』の眼目の言葉を、競べ馬の遊興に紛らわして出したのであり、「例の作者の筆法なるべし」と読み解いている。

⑤の《第十六段》は、「文対後虚」と名付けた六段からなる。六つの章段を二章づつの三セットにして分析する。最初の「対」は、第四十三段（春昼に読書する青年）と第四十四段（秋の夜に横笛を吹きながら山際の邸宅での仏事に出掛ける青年）である。支考も「春秋の風情を対して」と書いている。ただし、「男女の心遣ひなど、人知れぬ所に感を起こしたる」としているのは、第四十四段で、山荘の「寝殿より、御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目無き山里とも言はず、心遣ひしたり」という部分に引かれたかと考えられるが、ここはどちらも、貴族青年の姿・振る舞いに心惹かれた段である。その中で季節が春と秋という対照性を持つと把握するのが適切であろう。次の第四十五段（榎木の僧正）と第四十六段（強盗の法印）は、「おかしみを対して」おり、最後の第四十七段と第四十八段について支考は、兼好の真意は、「はかりがたし」とするが、『徒然草句解』に、この段は、「品こそかはれ其誠は同じ心にて侍る」とあるように、一対の段として把握されている。評釈の最後に「対」について、「文対」「意対」「句対」「字対」の各種があると述べている。

⑥の《第十七段》は、現行の第四十九段だけを取り上げて、「老病迅速」と名付けている。「此一章は不思議の置所也」と述べて、「名利の段にて人を拉げ、念仏の段にて、人をやはらげ、祭に生死を観じては、ここに老病の迅速なる事を示す」と書いて、名利の段（第三十八段）、念仏の段（第三十九段）、祭の段（第百三十七段）の三つの章段にも言及して、この第四十九段と合わせた四章段を、「是を作者の本意とは言はざらんや」とまとめている。そのうえで、『徒然草』は「始めより終わりまで一段一段に、次第ある五時八教の説法なるべきに、いとまある時間は繰りても見つべし」と書いて、『徒然草』の繙読を勧めている。「五時八教」とは諸仏典を体系づけて、教えを明らかにしようとする、天台宗の段階的な区分である。支考はこの言葉によって、『徒然草』を、一段ごとに思想が深まる書物として捉えている。このような部分を読むと、支考の『つれづれの讃』は、前稿（研究年報第三十九号）でも述べたが、「北国筋にて八十部払申候」という手紙が残っていることと思い合わせれば、『つれづれの讃』持参で、各地に俳諧行脚に出掛け、『徒然草』の講義も行って、人々に『つれづれの讃』をテキストとして、販売もしたのではないだろうか。『つれづれの讃』には、『徒然草』の原文も全段入っており、支考の解説文に導かれつつ、『徒然草』を読むことができるからである。

⑦の《第十八段》は、「不断不続」と名付けた八段からなる。第四十九段で老病迅速のことを言っておいて、次の第五十段に女が鬼になったという思いもよらぬの世間の噂話を持ってくる。その次の第五十一段には、宇治の里人が水車を上手に作った話というように、わざと切れ切れに言い離して書き、それでいて、その次の第五十二段は、仁和寺のある法師が、石清水八幡宮に参詣したつもりで、麓の末社を本宮と取り違えて帰ってきてしまった失敗談の末尾に、先達の大切さを書いて、前段の水車作りの段に続けている。そのような書き方を、支考は「千変万化の自在を得て、人をあやかすに妙ならずや」と、誉めている。

仁和寺の話は、その後にも第五十三段と第五十四段で、宴会や野遊びで興じ過ぎて失敗した話を書いている。このあたりは仁和寺つながりであるが、その後の第五十五段になると、「家の作り様」の話題となり、それまでと「似も似ぬ事に言ひなして、今一段も普請の世話ならんと思ふに」、今度は、第五十六段で、久しぶりに会った人との「物言ひのよしあし」、さらに第五十七段は「歌物語の歌のよからぬ」ことについて書くという具合に、『徒然草』には「断続の二法」があることを認識せよと述べている。

ずっと続くかと思うと続かないが、続かないと思うと続いたりするのが世の中であるということを、支考は銭の表裏を当てる勝負事にたとえている。断と続の二つがある時は、「断不続」、すなわち、常に続かない状態であり続けることは難しい。このことを『徒然草』の作者である兼好はよく知っており、「或は続き、或るは続かず」というように両者を取り混ぜて書いている、それが面白いと述べている。このあたりの支考の分析と解釈には、独自性がよく表れている。

以上、『つれづれの讃』巻之二に書かれている、支考の『徒然草』理解を辿ってきた。支考は、『徒然草』の各段の一つ一つに触れながら、繋がりや断絶について、詳しく述べている。支考は、『徒然草』の文章の流れに強い関心があり、ある特定の言葉なり思想なりに収斂させることなく、常に変化する生命体のように『徒然草』を捉えている。支考の『徒然草』観が明確に打ち出されている。

二　『つれづれの讃』巻之三の章段区分と解釈の独自性

巻之三の内訳を一覧すれば次のようになる。

① 《第十九段　棄恩無為　三章》……現行の第五十八段から第六十段
② 《第二十段　不信不疑　十三章》……現行の第六十一段から第七十三段
③ 《第二十一段　自利利他　十章》……現行の第七十四段から第八十五段
④ 《第二十二段　滑稽為文　五章》……現行の第八十六段から第九十段

①の《第十九段》は、「棄恩無為」と名付た三段からなる。この題名は、直接には第五十八段に書かれている、「静かならでは、道は行じ難し」という認識と、そのためには、世俗の縁を絶ち切らなければならないという主張を凝縮したものであるが、支考は次段が前段の注、すなわち、前段を敷衍したものであるとして、繋がりを重視した。「命は、人を待つものかは」という認識に根ざした出家の決意の即行が、親・子・主君などとの縁や、日常の尽きることなき俗事によって遮られてはならないという第五十九段の主張が、前段と繋がっていることを重視しているのである。そして、「おほむね心に相手ありて、此文勢は出たりと見ゆ」と述べている。「兼好とさしむかひゐたる相手の人を見るやうなり」「自己の道理を人にいひきかせて」いるようだ、とも想像している。このような支考の解釈は、各地への俳諧行脚の中で、人々に自説を講釈する支考自身の姿とも重なる。支考の『徒然草』解釈が生き生きとしているのは、自分の読み方を、明示していることからくるのであろう。なお、上記の二段に続く第六十段も繋がりを見出しているところに、支考らしさが窺われる。第六十段は、『徒然草』の中でも、とりわけ個性的な盛親僧都の人物像を描く段であるが、それを支考は、「是は山林の小隠に対して市中の大隠を説きたる也」とまとめ、直前の二段の証人と見る立場を表明している。

②の《第二十段》は、「不信不疑」と名付けた十三段からなる。現行の第六十一段から第七十三段までをひとまとまりとしている。《第二十段》の最初の十段は「故実の好悪」と「伝記の真偽」とまとめ、最後の第七十三段は、「仏神の奇特、権者の伝記、さのみ信ぜざるべきにもあらず」の部分を引用している。ここが重要であるという支考の判断であり、「偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず」というこの段の末尾の言葉を取って、「不信不疑」という四字題を付けたのであろう。

③の《第二十一段》は、「自利利他」と名付けて、第七十四段から始まる十章段をひとまとまりとしている。第七十四段はその後に続く諸段の「起語」であり、「自他の境界につきて心得あるべき」ことが書かれているとまとめている。「爰にはじめて変化の二字をいへるなど、文章の奥義さらにはかりてはかりがたかるべし」と、兼好の文章の書き方を誉める。次の第七十五段は、「爰につれづれの二字をよび出して、全く自己の境界を讃したる也」と述べ、前段の「変化の二字」に照応させて「徒然の二字」と書いている。しかも、支考は「つれづれ」という言葉が『徒然草』の中で、三つの章段に出てくるが、「此一段のつれづれのみ、つれづれ艸の骨なりとはいふべし」と指摘している。当該箇所を読み解くだけでなく、『徒然草』全体の中で位置づけながら、言葉の照応を注意深く読んでいる。支考は第七十四段と第七十五段の連続性に注目して、「自をほめ、他をほむる境肝要なり」と述べる。四字題の「自利利他」は、ここからの命名であろう。このことは、支考が、兼好の自己認識と、兼好による他者認識の双方に注目していることを示し、ひいては、自己と他者の境界を明確に認識するところか

ら、批評精神が生まれることも発見したのであろう。

こうして、第七十五段は「自己の道心を説きつくし」て、その後の四段に「浮世法師のありさまを説きつくせる也」という文脈展開が可能となった。さらに第八十段の世間の人々にありがちな、他人の境界への越境や第八十一段から第八十四段に描かれる、頓阿・弘融の二人の法師と、西園寺公衡と洞院実泰の二人の公家を誉めている『徒然草』の書き方が、第八十段の「我身に疎き段の表裏なるべし」という章段展開につながったと支考は把握した。このような一連の書き方に、兼好の「筆端」、すなわち、筆の勢いを支考は認めている。さらに、これに続く第八十五段の賢愚論に共鳴し、ここまでの十段の総まとめを詳しく書いているのは、支考がこのあたりに、『徒然草』の一つの山場を見ているからであろう。

巻之三の最後は、④の「滑稽為文」と題する五段、すなわち、惟継の秀句、下部の酒、道風の朗詠、猫又、やすら殿についての諸段である。これらの段を滑稽な話と認定し、庚申待の場でこれらの話柄を人々が軽口に仕立て直して話し合うという場面を、支考が創作して書いている。これは、支考による「筆の遊び」、すなわち「筆すさび」であろう。他の注釈書類には見られない、独自の書き方である。

三　『つれづれの讃』巻之四の章段区分と解釈の独自性

巻之四の内訳を一覧すれば、次のようになる。

①《第二十三段　分段生死　三章》……現行の第九十一段から第九十三段
②《第二十四段　殿上褒貶　十章》……現行の第九十四段から第百三段
③《第二十五段　日暮蹉跎　十一章》……現行の第百四段から第百十三段
④《第二十六段　異名異説　四章》……現行の第百十四段から第百十七段
⑤《第二十七段　庖厨不忍　三章》……現行の第百十八段から第百十九段
⑥《第二十八段　十三箇条　十三章》……現行の第百二十段から第百三十一段
⑦《第二十九段　自己不昧　五章》……現行の第百三十二段から第百三十六段

巻之四は、第九十一段から第百三十六段までを七分割して大段としている。この七区分の四字題を順に見てゆくと、①の「分段生死」は第九十一段からの三段に相応しい題名である。赤舌日の吉凶から易の変易を導き、日々の生死の変相を説き、次段で弓の一矢から念々の生死迅速を説き、さらに次の段に牛の生死から「出生入死の自在」を言う、というのが支考の読解である。この三段は、人生・日々・念々に分けて、それぞれの段において生死を書いているところから「分段生死」と名付けたのである。「分段生死」という言葉は、元来、仏教用語で、六道輪廻における生死は、人により身体や寿命に違いがあり分段されていることを指すが、支考は『徒然草』の眼目が生死にあり、そのことは他の箇所でも書かれているが、とりわけこの連続する三つの段において、細かく「三段の生死」を説いていることを発見したのである。

②の「殿上褒貶」は、第九十四段からの十段を蔽う題名である。この中で、第九十六段の「めなもみ」、第九十七段の「損なふ物」、第九十八段の『一言芳談』に書かれている内容は「殿上」、すなわち貴族にはかかわらないが、支考は貴族たちにかかわる話を中心に把握した。人間に対する兼好の批評性を眼目として、このような四字題を宛てたことがわかる。

③の「日暮蹉跎」は、第百十二段に見える「日、暮れ、道、遠し。我が生、既に蹉跎たり」を、四字題に圧縮したものである。ただし、この言葉が大段《第二十五段》に含まれる他の段までを蔽うかと言えば、やや無理があろう。③の冒頭部の段は、男女の交際を描き、支考自身も、このあたりは『源氏物語』を俤にしているとか、「此の十一章は見定め難き所あれども」と率直に述べている。にもかかわらずこのような四字題にしたのは、支考が第百十二段に書かれている、「諸縁放下」のためには、他人からどのように譏られても構わないという、兼好の強い表白に共鳴したからであろう。

「寸陰、惜しむ人無し」と書き出される第百八段も、「生死の観法」として支考は注目している。そのうえで「日暮蹉跎」という四字題を掲げたのは、人生も終わりに近づいているのに、究めようとする道は遠く不遇であるという、人間存在の普遍的な寂しさの象徴となるからである。

④の「異名異説」は、名前に関する段を主としてまとめ、⑤の「庖厨不忍」は、第百十八段を二段に分けて、西園寺実兼の忠告を明確にすることを主張している。

⑥の「十三箇条」という四字題は、これまでにない書き方である。《第二十八段》は、通行の第百二十段以下、第百三十一段までの十二段をまとめて大段とした。ただし、支考は百二十五段を二段に分けているので、⑥の章段数が十三章となった。⑥は、十三の章段が一段ごとに「起結の文勢」があるという支考の認識から、一つの題名に集約できないと考えて、「十三箇条」という四字題としたのだろう。奇抜な発想である。

⑦の「自己不昧」は、自分は「不昧」である、つまり、明らかであり、邪欲にくらまされないという意味で、第百三十四段の「己を知る」ということを眼目として付けた四字と思われる。

四　『つれづれの讃』巻之五の章段区分と解釈の独自性

巻之五の内訳を一覧すれば次のようになる。

①《第三十段　都伎波奈　四章》……現行の第百三十七段から第百四十段
②《第三十一段　東西貧富　二章》……現行の第百四十一段から第百四十二段
③《第三十二段　一念変相　七章》……現行の第百四十三段から第百四十九段
④《第三十三段　資朝不計　五章》……現行の第百五十段から第百五十五段
⑤《第三十四段　基俊無益　九章》……現行の第百五十六段から第百六十四段
⑥《第三十五段　文武有家　六章》……現行の第百六十五段から第百七十一段
⑦《第三十六段　修身侯命　四章》……現行の第百七十二段から第百七十五段
⑧《第三十七段　灯前夜話　七章》……現行の第百七十六段から第百八十二段

巻之五は、第百三十七段から第百八十二段までを八分割して大段としている。この八区分の四字題を順に見てゆくと、①の「都伎波奈」は、第百三十七段の冒頭部の「花は盛りに、月は隈無きをのみ見るものかは」を凝縮して、月と花、すなわち「つきはな」を四字題に合わせて万葉仮名で表記したとも取れるし、「すべて、月・花をば、然のみ、目にて見る物かは」の部分には、「月花」とひとまとまりの表現になっているので、むしろこの部分による可能性が強いかもしれない。

いずれにしても、今までにない四字題の表記である。支考はこの段の記述を「未満の楽」と「無常の観法」の二節に分けて考えるのがよいと述べ、「未満の楽」については、は「風情」と「道理」の二種が書かれていることにも触れ、支考の分析的な読解力が開陳されている。「或は月花に男女を対し、或は夷洛の人品をあはせ、或は泉に雪にと言へる文章の変化はさまざまなれども、万の一字を三所に置きて、畢竟は物の盈虧をいへるなるべし」とまとめている。なお、「翻刻『つれづれの讃』」で、「万の一字」が「万の一宇」となっているのは誤植である。①は、百四十段まで含むが、支考の言い方に倣えば、第百三十七段の余韻であり、適切な区分と言えよう。

②は二段であるが、どちらも東国武士の意外な発言を書いた段なので、まとめているのはわかるが、「東西貧富」という四字題から見て、支考は尭蓮上人が東国人の経済力を踏まえた発言をしていることに注目している。これ以後は、章段数を多くまとめている。

③の「一念変相」という四字題は、特定の段からの抽出ではなく、支考がこの大段の七段に共通するものとして名付けたのであるが、最初の四段は「生死の相」、後の三段は「筆のすさみ」であると述べている。

④⑤は人物名でまとめ、⑥⑦は人間の生き方にかかわる。それぞれが人物論である。

⑧が「灯前夜話」となっているのは珍しい命名である。この七段は宮廷にかかわるさまざまな故実が書かれているが、鎌倉武士にかかわるものもある。したがって、このひとまとまりを適切にまとめる題名は難しく、「有職故実」という四字が無難なところであるが、そこを支考は、談話の情景として読み取って「灯前夜話」と命名していることが独自の読み方である。しかも、この大段の最初の第百七十六段は、「黒戸」の由来を書いた段であるが、なぜこのような段がここに出てきたかということにも思いを巡らせている。「黒戸の一章は前の冬せばき所にて、火にて物いりなどといへる」ところからの、自然な連想であろうと推測しているのである。兼好が「黒戸」という宮中の部屋の名前の故実を書いた執筆心理に思いを巡らせて解釈していることがわかる。

五　『つれづれの讃』巻之六の章段区分と解釈の独自性

巻之六の内訳を一覧すれば次のようになる。

①《第三十八段　物格知至　五章》……現行の百八十三段から第百八十七段
②《第三十九段　一生一事　三章》……現行の第百八十八段から第百八十九段
③《第四十段　莫見乎隠　三章》……現行の第百九十段から第百九十二段
④《第四十一段　人心掌握　二章》……現行の第百九十三段から第百九十四段
⑤《第四十二段　起請不頼　十八章》……現行の第百九十五段から第二百十四段

巻之六は、第百八十三段から第二百十四段までを五分割して大段としている。①は、最初に律の法令を挙げ、次に鎌倉武士の倹約と道を知る用意を中間に配

置し、最後に愚直で謙虚であることが、すべての道に適応するというひとまとまりを、「物格知至」と把握している。

②が三章となっているのは、支考が、第百八十八段を二つに分けているからである。この段の前半で、「取捨の分別」の譬えを出し、「一念発起」の重要性を述べている。その後に出てくる登蓮のエピソードは生死にかかわる話なので、これを中間として、結語の段で、「万物の不定を説きつくして」、不定を定と言っている点に「文筆自在」を読み取っている。「一事」と「一生」が出てくるこれらの段をひとまとまりとして、「一生一事」とした所に、支考の眼目が込められた。

③は、男女の交際のあり方から、夜に五感が冴えること、夜の神仏詣でへと筆が進む主旨を、支考は、「隠れたるよりあらはるるはなし」という「隠見」を述べているひとまとまりと読み解いて、『中庸』の漢字表記を使って、「莫見乎穏」という四字題を付けた。この言葉は一般には、秘密にしていてもかえって世間に知られてしまうことを言うが、支考は「幽微に風情」があるとも述べているので、先の『中庸』の言葉に続く、「微かなるより顕らかなるはなし」も含めて、「深遠幽微」の意味で使っている。

支考は④の前段を他人の愚案、後段を自己の明眼（見識）と把握している。「人心掌握」という四字題は、他者への無理解と嘘の諸相を書いた章段を、「人間の心」の諸相と統括して、命名したのであろうか。

⑤の「起請不頼」は、有職故実にかかわる場面と登場人物を描くことに力点があり、宮廷説話の様相を帯びるが、支考は、そこには触れていない。題名は二百五段の起請と、第二百十一段の不頼による。

六　『つれづれの讃』巻之七の章段区分と解釈の独自性

巻之六の内訳を一覧すれば次のようになる。

①《第四十三段　大欲無欲　三章》……現行の二百十五段から第二百十七段
②《第四十四段　自知自罪　十三章》……現行の第二百十八段から第二百三十段
③《第四十五段　無知無能　三章》……現行の第二百三十一段から第二百三十四段
④《第四十六段　無心所着　一章》……現行の第二百三十五段
⑤《第四十七段　非実非虚　二章》……現行の第二百三十六段から第二百三十七段

七段

巻之七は、第二百十五段から第二百三十七段までを五分割して大段としている。

①は、三段のうち、最初の二段は鎌倉武士の質実な暮らしぶり、最後が大福長者の暮らしぶりと金銭観で、四字題の「大欲無欲」は、大福長者に対する兼好の論評から来ている。この三段をひとまとめにしたのは、武士と長者の生活態度を好対照と見て、その対比を一対として把握する物の見方を提示するためであろう。

②は、十三段が大きくまとめられている。狐に関する話が段を隔てて二話あることに注目したのは、支考の独自な視点であるが、狐の話の間に位置する段も含めてひとくくりにして四字題を「自知自罪」と命名している。この命名は、特定の段表現に依るのではない。楽器のこと、祭のこと、有宗入道が庭に食べられるものを植よと言ったこと、音曲のことなどこの大段《第四十四段》に含まれる段は多彩である。四字題の命名については、未詳である。

③は、②から一転して、四段のみからなり、しかしもそれを三段としているのは、第二百三十二段は「また」と言う言葉によって一段に繋げられると支考が考えたことによる。四字題の「無知無能」は第二百三十二段の冒頭の一文から取っている。

④は一段のみからなるのが珍しく、これまでの例としては、起語の序段、それに続く第一段から第九段の前半部までの各段、そして第四十九段である。支考は、この第二百三十五段を、『徒然草』の「惣結語」とまで位置づけている。支考は、兼好がここまで『徒然草』を書き尽くしてきたことに注目する。そのうえで、自分の心は、主なき家の「虚」、形なき鏡の「虚」であろうかと、「諸人面前に投げ出して、古今の注者の褒貶に任せたるは、是さらに作者の大賊意にして我楽の二字を釘着すべき事也。すべてつれづれの二百余章は、本より無念無想なりといふを、此三節（空き家・鏡・空の器の三例）にまぎらはして、かくは又筆の鼓舞なるもの也」と述べている。そして、兼好には「とどむべき一物もあらねば」「無心の所着」であると結論付けている。

「無心所着」とは、歌論用語で、「五七五七七の各句ごとに関連のない言葉を出して、一首の全体が意味をなさず、まとまりがない歌」ということである。四字題の「無心所着」はこのような歌論用語を当て嵌めたのであろうか。なお、架蔵本も「翻刻『つれづれの讃』」でも、冒頭部の「標目」では「無心所着」となっ

ているのだが、巻之七の大段第四十六段の見出しの所では、架蔵本は、残念ながら「虫食い」によって「無心所」までしか読めない。「翻刻『つれづれの讃』」では「無心所有」となっている。「所有」は誤植であろう。

⑤の「非実非虚」は、子どもの悪戯で狛犬の向きが余所と違うことにに感涙を流した上人の話を「非実」、次の柳箱に物を置く時の故実に二説あることを「非虚」として一対の段としてまとめているが、ここは『徒然草』の余韻であり、「さるは、鏡の一段（引用者注、第二百三十五段）につれづれの趣意は説きおはりて、今は虚実の自在に遊べるなるべし」と、支考は捉えている。

七　『つれづれの讃』巻之八の章段区分と解釈の独自性、および本稿のまとめ

巻之八の内訳を一覧すれば次のようになる。

①《第四十八段　自讃七条　二章》……現行の第二百三十八段から第二百三十九段

②《第四十九段　趣意已決　三章》……現行の第二百四十段から第二百四十二段

③《結語　一章》……現行の第二百四十三段

巻之八は、第二百三十八段から第二百四十三段までを三分割して、それぞれを大段としている。①が「自讃七条」とあるのは、第二百三十八段の冒頭部に「自讃とて、七箇条」という言葉が出ているのを四字にまとめたものである。巻之八では「第四十八段　自讃七条一章」となっているが、第二百三十八段と次の第二百三十九段の二段をひとまとまりとしている。「標目」で、「自讃七条　二章」とあるのが正しい。自讃七条の後の段も続けてひとまとまりとしたのは、自讃の最後に書かれている、二月十五日の千本釈迦堂での聴聞の夜の出来事とのつながりで、八月十五夜と九月十三夜が良夜であることを書いた、という章段配置の連続性への理解を示す。

②の「趣意已決」は、「標目」でも巻之八でも二章となっているが、正しくは三段からなる。恋の情趣、諸願妄想、名色味を論じる連続三章段の両端の段に「不如（しかず）」という評言が出ていることへの注目からである。支考は、これまでも章段の断続を重視しており、その際に表現の共通性に留意していた。このひとまとまりは、「つれづれ一部の余韻とは見るべし」と述べていることに鑑みると、四字題は「趣意已決」となるが、巻之八に出ている題は「已」なのか「已」なのか微妙であり、「翻刻『つれづれの讃』」では「已決」である。首巻の標目では「趣意已決」である。

③は、「結語一章」である。『徒然草』の最終段「八つになりし年」を、父親たちの笑いで締め括ったことを、「此の一に筆をとどめたるは、本朝無双の文人にして、扶桑第一の隠者なるべし」と評して『つれづれの讃』の大尾とした。

最後に「門人　渡内部狂」という別名で、支考自身による「跋」を書き添えている。そこでは、「此讃のむねとする所」は、『徒然草』を四十九段として、その区切り方が分かるように「一段の意を四字につづめて漢字の標目」としていること、『徒然草』の数多くの注釈書を一括して「十五抄」と呼称して、それらの「十五抄」に対して独自の説を唱えたことの二点を述べている。

このことは、私自身が本稿と前稿で『つれづれの讃』を通覧した実感と一致している。それに加えて、本稿から得ることができた支考の『徒然草』観の特徴を述べるならば、支考は、「生死」という言葉に繰り返し触れて『徒然草』の字眼としている。この言葉は『徒然草』の中で、第四十一段と第九十三段の二回のみ、「生死の相」（第九十三段）を含めても三回しか登場しないが、支考は「生死」を単に「死」として捉えるのではなく、「生まれてから死ぬまでの一生」と捉えている。そのことと関連づけるならば、「変化」という言葉も、『つれづれの讃』の中で重要性を帯びて繰り返し登場し、首巻に提示されている十三種の分析批評用語を統括する言葉として、最後に置かれている。支考の著作として最も早く書かれた俳論書の『葛の松原』の中で、支考は、「俳諧は世の変相にして、風雅は志の行き所なり」と書いている。芭蕉の生前のことで、『つれづれの讃』よりも、早い時期である。

支考が、『徒然草』を大きく区切り直したのは、『徒然草』の中を流れる、とどまることのない変化の諸相を明確化するためだったのではないだろうか。『つれづれの讃』に横溢する支考の言葉の氾濫は、兼好が『徒然草』の序段で、「心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ」と書いたことを思わせるし、そのことは支考自身が一番痛切に感じていたことだろう。生死という変化し続ける大河のなかで、支考は芭蕉の俳諧を全国に伝え、芭蕉が目指した俳文という新しい文学スタイルを揺るぎないものとするために、俳文撰集をまとめた。いかに簡潔に散文の文章を書き、いかに世の中と他者を明確に認識し、いかに自分が言わんとすることを書き尽くすか。その手本と

なるのが『徒然草』であることを、支考は『つれづれの讃』によって示した。この書名の中に、支考の心の真実が込められている。

注

（1）『徒然草』の注釈書として刊行された嚆矢は、『徒然草寿命院抄』（二冊、一六〇四年）である。ここでは、『徒然草』の本文は掲載されていないが、上巻末尾の「クスシアツシケ故法皇ノ」の段に「百三十七」とあり、下巻末尾の「八ニナリシ年」の段に「百五」とある。『寿命院抄』については、拙稿「『徒然草寿命院抄』の注釈態度」（『放送大学研究年報』第十六号、平成十一年）参照。

（2）『つれづれの讃』の本文引用は、前稿と同様に、架蔵の九巻九冊本により、適宜、漢字を宛て、句読点を打つなど、読みやすくした。また、増補国語国文学研究史大成6『枕草子・徒然草』（斎藤清衛・岸上慎二・冨倉徳次郎編著、三省堂、昭和五十二年）所収の冨倉徳次郎による解説付きの「翻刻研究文献・『つれづれの讃』」も参照し、翻刻に誤植がある場合は、その旨を注記した。

（二〇二二年十一月二日受理）

More Considerations of Kagami Shiko's *Tsurezure-no-san*

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

Tsurezure-no-san（つれづれの讃）is a book of criticism upon the whole of *Tsurezuregus*a（徒然草）by Kagami Shiko（各務支考、1665～1731）who was a disciple of Matsuo Basho（松尾芭蕉）and counted as one of Shomon Jittetsu（蕉門十哲、Ten Eminent Disciples of Matsuo Basho）. In its postscript, he says that he wrote this book in 1711.

The present writer calls *Tsurezure-no-san* a book of criticism, not a commentary, because it is original in the following points. Firstly, *Tsurezure-no-san* divides Tsurezuregusa into forty-nine sections according to their contents, giving each of them a title consisting of four Chinese letters. Secondly, it criticizes the content of *Tsurezuregus*a, using thirteen analytical terms such as 諷詞 satire, 褒貶 praise and censure, 断絶 break, 虚実 truth and falsehood, 変化 change etc.

This is Shiko's original method of approach to *Tsurezuregus*a, which cannot be found in many other commentaries on *Tsurezuregus*a written in the Edo era（江戸時代）. By this way, Shiko presented a new way of reading *Tsurezuregus*a.

My previous monograph 'A New way of reading *Tsurezuregus*a presented in Kagami Shiko's *Tsurezure-no-san*（放送大学研究年報、Journal of The Open University of Japan, Number 39, 2021）' was discussed from these points of view. However, it dealt with the contents of the first volume and the beginning of the Second volume of *Tsurezure-no-san*：that is, thirteen analytical terms, five important main lines of *Tsurezuregus*a and biographies and legends concerning Kenko（兼好）. Shiko's interpretation to the eight volumes of *Tsurezuregus*a as a whole was still untouched. So this monograph, as a continuation of the previous one, tries to survey those eight volumes as a whole and grasp the entire picture of *Tsurezure-no-san*.

It is characteristic of *Tsurezure-no-san* that it generally pays attention to the connection between chapters and sections as well as the development of each prose. From the perusal of *Tsurezuregus*a, Shiko realised concretely Kenko's particular way of developing his prose, of expressing his thoughts, of changing topics etc.. This was, in fact, the discovery of a new way of reading *Tsurezuregus*a. Moreover, Shiko trys to apply Kenko's method of expression to making a theoretical support for a new style of literary expression named 'Haibun'（俳文）.

Shiko's *Tsurezure-no-san* is epoch-making in this point：it presented an art of writing, showing how to write unfixed prose instead of fixed verse like Waka（和歌）and Haikai（俳諧）. Shiko produced the model of writing he aspired through his analysis of various styles found in *Tsurezuregus*a. In his *Tsurezure-no-san*, Shiko constructed a theory of the new field of prose named 'Haibun' in order to succeed and develop the possibilities of this style of expression which his master Basho had pioneered and wished to complete.